

鷹の目の狩人

XII

幕末の美錦絵

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原 道晴

城郭研究家として、城郭錦絵に興味を抱いたのは、自然の成り行きであった。きっかけは、地方の古書即売会で、木曾街道の浦和宿の錦絵があまりにもきれいなので購入、神田で調べてみると、驚くほどの高値であったことだ。相場観が理解できると、殆ど注目されることのない、幕末の歴史絵といわれるジャンルに属する城郭絵、合戦錦絵を全国で購入した。今では、錦絵の専門美術館以上の所蔵量である。

錦絵は印刷技術でいうと、凸版多色刷印刷である。今のよう、4色や7色の網点による重ねた色再現ではなく。専門用語で線画といわれる単色印刷の多重印刷法である。従って基本は微細な板目木版彫刻による多色印刷で、色数や版木は色の種類があるだけ全てということになる。重ね刷りでない故に、色は鮮やかできれいである。版木は基本となる墨版と色版に分れる。色版は場所が離れると同一版上に数色掘られることもある。基本、桜材が使われている。日本では古来から仏典等で培われた木版技術であるが、幕末に至り一挙に開花し、mm当たり5本の毛髪、今でいうインチ125線の高細線凸版印刷である（今、高細線とはオフセットで800線とか、1,200線であるが）。

印刷技術として、極めて優秀な印刷、観賞に耐える印刷であるが、実物を見る機会は意外に少ない。発行当時、今のプロマイドやチラシ、新聞のように扱われ、多くは捨てられる運命にあったこと、実物が多く海外に流出したこと、光に弱く、退色するため、博物館等では実物を展示せず、絵柄をオフセットやインキジェットで再現し、内容を伝える

ることで良しとされている。決して木版多色印刷の味わいを見せてはくれないのである。これでは、錦絵の魅力が伝承できないのではないかと思えてならない。



長篠合戦、武田勝頼部分
リアルな武士の表現

錦絵の魅力は多彩な再現技術にある。基本は微細な単色印刷、掛け合わせでない鮮やかな色再現であるが、中には、重ね印刷もあり、セオリーに反するが、ぼかしもある。ぼかしといわれる垂直の断面でなく、斜めに掘り、インキをぼかす方法と、印刷面のインキを濡らして濃淡をつける方法である。究極は空刷りといってインキをつけないで、凹凸だけで絵柄を再現する方法がある。これらの技法と色は初版200部においては、絵師が立ち合い忠実に再現されるが、後刷になると、版木が摩耗し、再現性が低下する以外に、ぼかしのような難しい技術の省略や、場合によっては、色さえ変えられる場合がある。版木を掘りなおした場合は、絵柄まで変わってしまう。錦絵が絵師、絵柄、保存状況で評価が変わる理由である。

印刷業界でこのようなことをいうのは申し訳ないが、骨董業界では錦絵のオフセット印刷や画集は全く評価されない。定価の10分の1という場合もある。彼らはあくまで今再現されないものに評価をするのである。今の複製木版錦絵印刷も博物館では1枚単位で高額で売られているが、技術の伝承という大義はあるが、複製にすぎず、古物商の評価は高いとは言えない。

これまで、各地で城郭展を開催、本物を展示してきたが、期間が長いと照明を落とさざるを得ない。展示換えもある。錦絵の魅力は手触りにもあるが、本物に接し、鑑識眼を養う以外にない。幕末に描かれた国芳の武者絵の凄味、空飛ぶ絵師貞秀のリアルさは現在、再現不可能である。



錦絵の作成行程、絵師、彫師、刷師を歌川豊国が表現

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH